

P12-3 回復期リハ病棟における多職種連携の重要性 —理学療法士の専門性を生かした情報共有により チームの方向性の統一が図れた症例—

○山下 範恭(やました のりゆき)¹⁾, 森本 信三¹⁾, 尾川 達也²⁾

1) 白浜はまゆう病院 南紀白浜温泉リハビリテーションセンター,

2) 西大和リハビリテーション病院 リハビリテーション部

Key word : 回復期リハ病棟, 多職種連携, 専門性

【目的】回復期リハビリテーション(リハ)病棟として、リハスタッフ間だけでなく多職種での情報共有、およびチームアプローチが重要とされている。しかし、日々の臨床現場ではチーム内で意見が異なることもあり、方向性を統一して円滑に進めることが難しい場合もある。今回、回復期リハ病棟入院中の患者に対してチームアプローチを実践する際、多職種間で退院の方向性について考えが異なる症例を担当した。その中で、理学療法士の専門性を活かした多職種への情報提供により方向性の統一が図れ、自宅退院が可能となった症例を経験したので報告する。

【症例紹介】本症例は80歳代後半の男性。現病歴として、平成26年12月まで自宅で生活されていたが、転倒し第10胸椎圧迫骨折を受傷、その後遅発性マヒを併発する。当院に転院し約3ヶ月リハを受けるも自宅に帰ることができず、平成27年5月に施設への退院となった。今回、平成27年10月に黄色靭帯骨化症除去、内視鏡下除圧術を施行し、平成27年12月に当院の回復期リハ病棟へ転院となった。本人、妻の希望としては、「手術施行後に身体機能向上を図ることができたら自宅へ退院したい」とあり、娘二人も両親の希望に添えることができたらと希望していた。

【説明と同意】今回の症例報告にあたり、ヘルシンキ宣言に基づき対象者には十分に説明を行い、本人より書面にて同意を得た。

【経過】入院時理学療法では全身状態に合わせ、立位、歩行能力の向上を目的に動作練習を実施した。入院時の日常生活自立度はFIM運動49点、認知32点であった。入院34日目、医師(Dr)、看護師(Ns)、医療ソーシャルワーカー(MSW)、理学療法士(PT)にて初回カンファレンスを実施した。カンファレンスでは入院時より術後経過が良好で身体機能の改善が順調であったことから、DrとPTは自宅の可能性を含めて退院支援を行うことを提案した。一方、NsとMSWは退院先として施設の受け入れが整っていること、自宅が市営住宅の2階で階段昇降が必要であること、主介護者も要介護者であり介護力が少ないことから施設の方向で退院を進めるよう提案した。カンファレンスの結果、本人と家族の希望を尊重し自宅退院も考慮しながら、施設退院の方向性となった。カンファレンスの際に問題点として挙がっていた環境要因を評価するため、入院55日目、本人同行のもと環境調査を実

施した。その際、階段昇降は手すりを把持して可能であり、自宅内の移動も伝い歩きで自立レベルとなっていた。実施後、PTよりNs、MSWに環境調査の結果と現在の身体能力に関する情報を報告し、初回のカンファレンス時よりも自宅復帰の可能性のあることを説明した。PTの説明後、Ns、MSWともに退院先の方向性が施設から自宅へ変わり、チーム内で方向性を統一することができた。その後、自宅復帰のための具体的なアプローチとして、トイレ動作ではNs協力のもと導尿の指導を実施し自己導尿を獲得した。また、入浴に関しては退院時も自宅で入ることが困難であり通所介護を利用することとなった。入院83日目、日常生活自立度はFIM運動74点、認知32点となり、本人や家族が希望していた自宅への退院が達成された。退院後、NsとMSWに①自宅復帰ができた要因、②退院先の方向性を統一することができた要因についてアンケートを実施した。その結果、①では自己導尿が獲得できた、身体機能が向上したなど患者のADLの向上に関する回答があった。一方、②では環境調査後の自宅生活の自立度や身体能力の説明とあり、PTからの専門的な情報の提供に関する回答があった。

【考察】本症例では、初回カンファレンスの際に多職種間で方向性に関する意見に違いがあり、チーム内で統一が図れていなかった。しかし、自宅環境における自立度の判断などPTの専門性を生かした情報を提供することで、NsやMSWの考え方が変わり、本人が希望する自宅復帰にチーム全体の方向性を統一することができた。糸谷らによると、環境調査を行うことで家屋環境を詳細に把握することができ、より具体的かつ退院後に繋がるリハを実施可能にする。また、自宅復帰に向けての包括的なリハを行うことにより自宅復帰率が向上し、患者や家族との信頼関係を築くこともできると述べている。今回のように、環境調査を実施する際は多職種内でその情報を十分に共有することで、よりチームとして方向性を統一させたアプローチが可能であると思われる。

【理学療法研究としての意義】本症例を通して、PTの専門性を生かした情報を多職種と共有することでチーム内での方向性の統一が可能となり、回復期リハ病棟におけるチームアプローチを実践する際のPTの重要性について示すことができた。